

黄金時代オランダの教養女性の活動

——コンスタンティン・ホイヘンスに関わる3人の女性に焦点をあてて——

三 島 郁

Activities of Cultured Women During the Dutch Golden Age : The Case of Three Women in Constantijn Huygens' Circle

MISHIMA Kaoru

Abstract : Constantijn Huygens (1596–1687), was a secretary of Stadtholder, Willem III of Orange in the Netherlands, and was an active musician and poet. He was a ‘homo universalis’ and lived during the Dutch Golden Age. He maintained relations with René Descartes (1596–1650) and music theorist Marin Mersenne (1588–1648) and exchanged letters with musicians at the French court. He particularly enjoyed educated circles including those indulging in music. These circles were frequented by educated women who played a major role.

In this paper, I will analyze and examine the activity of three of the most educated Dutch women at that time –Utricia Ogle (1616–74), an English diplomat; Anna Maria van Schurman (1607–78), a highly educated woman proficient in 14 languages; and Maria Tesselschade Roemers Visscher (1594–1649), a poetess. Huygens' correspondence with these women sheds light on a part of the culture life at that time. The trio spent much of their time composing poems, making music, and studying philosophy. It is interesting that the women mentioned playing music with their friends and famous musicians, and also exchanged information about new instruments and musical scores in detail with famous French and German musicians.

はじめに：

「普遍人 homo universalis」ホイヘンス

コンスタンティン・ホイヘンス Constantijn Huygens (1596–1687) は、日本では、物理学者や土星の輪の発見者として名高いクリスティアーン・ホイヘンス Christiaan Huygens (1629–95) の父として知られる。しかしコンスタンティンのほうも、黄金時代のオランダが生み出した教養人として、歴史上たいへん重要な人物である。

ホイヘンスは、オランダ総督オラニエ公ウィレム3世¹⁾の秘書官、そして詩人であった。デン・ハーグに生まれ、ライデン大学で法律などを学び、その後法律家や外交官としてヨーロッパ中を飛び回っている。彼

は、顕微鏡を発明した科学者レーウエンフック Antoni van Leeuwenhoek (1632–1723) や画家フェルメール Johannes Vermeer (1632–75) など²⁾、自然科学や芸術など様々な分野の人物たちと幅広い交流をもっている。とりわけ、フランスの宮廷付き音楽家や理論家とのあいだで書簡を盛んにやり取りしており、その中には後に言及する作曲家ボエセ Antoine Boësset (1586–1643)、作曲家デュ・モン Henry Du Mont (c 1600–84)、リュート奏者のデュフォ Dufaut (c 1604–72 以前)、そして理論家のメルセンヌ Marin Mersenne (1588–1648) などがいた³⁾。そのように音楽家との交際があるのも、ホイヘンス自身が、みずからリュート、テオルボ、ヴィオール、チェンバロ、ギターなど多くの楽器を演奏し、作曲をおこなうなど、愛好家の域をはるかに超える音楽活動を行っていたゆえんでも

ある⁴。さらに、彼自身が作曲し、テオルポ用の通奏低音付きの22曲のラテン語の宗教曲、12曲のイタリア語の世俗曲、そして7曲のフランス語の世俗曲を所収した歌曲集“*Pathodia sacra et profana*” (1647)も、友人の、ルイ13世下で出版の特権をもつ唯一の出版者であるバラール Robert Ballard (c 1610–before 73)のもとで出版している (Rasch 1992: 3)。

このような「普遍人」であるホイヘンスが、様々な人たちとの交流の中でとりわけみずから楽しんで熱心に行っていたのが、音楽の演奏を含めた教養サークルの活動であった。このような活動には教養の高い女性たちも参加しており、その中で彼女たちの果たす役割は重要であった。本論では、このようなホイヘンスが関わり書簡を多く交わしている、黄金時代オランダのもっとも高いレベルでの音楽活動を含めた知的サークル内外で、彼にもっとも近いオランダの教養人女性である、イギリス女王メアリーの侍女ユートリシア・オーグル Utricia Ogle (1616–74)、ユトレヒトの知識人スフルマン Anna Maria van Schurman (1607–78)、そして詩人テッセルスハーデ Maria Tesselschade Roemers Visscher (1594–1649)の教養活動の内容を分析、考察する。

尚、本稿で使用したホイヘンスの書簡資料は、「オランダ歴史協会」が、Worp がまとめた書簡集をウェブ上に公開し、ホイヘンスの書簡のほとんどが参照できる「ホイヘンスの書簡集 1608–1687」、19世紀末に Jonckbloet & Land が編集した音楽に関する書簡集 (1882)、そして2008年にオランダのホイヘンス研究の中心的存在である Rasch がこの1882年のものをより正確に編纂し、さらに書簡についてはすべて現代オランダ語に訳した『ホイヘンスをめぐる音楽に関する300通の書簡』である。

1. 音楽の場

ホイヘンスはさまざまな種類の音楽の集まりを主宰し、また他の場所でも参加していた。すでに晩年に近づく1679年に、彼はデン・ハーグのオランダ総督の家系オラニエ＝ナッサウ家の同族であるナッサウ公マウリツ Maurits van Nassau (1567–1625)に、オルガンのある宮廷の広間の使用許可をもらえるようお願い出ており (7137: 1679. 10. 2.)⁵、彼がまだ活発に音楽活動を行っていたのがわかる。

当時パリでは、ルイ14世の宮廷生活、社交界で中心的存在であった、ニノンことランクロ夫人 Mademoi-

selle de Lenclos (Ninon de Lenclos) (1616/20–1706) がサロニエールをつとめるサロンの人気があった⁶。リュートやチェンバロの才があるニノンのサロンではしばしばコンサートや音楽談義がおこなわれており、ホイヘンス自身だけでなく⁷、文芸批評家サン・テヴルモン Charles de Saint-Évremond (1610–1703)も彼女をすぐれたリュート弾きとして評価している⁸。しかしホイヘンスの本拠地であるオランダの主な音楽の集いの場を簡単に概観することにする。

1. 1. コレギウム・ムシクム *De muziekcolleges*

彼の最初期の音楽家との交流は、子供時代に体験した、アムステルダムでスウェーリンク Jan Pieterszoon Sweelinck (1562–1621)が指揮していたコレギウム・ムシクムであった (Grijp 1987: 2)。その後自身が子供をもつようになってからも、アムステルダムの友人である商人ソイエ Nicolas Sohier (1590–1642)へ宛てた手紙の中で、「通奏低音のないヴェネツィア人 [作曲家]⁹のマドリガルを、小さな歌手¹⁰の音楽教育のために送ってくれませんか」と頼んでいる (1810: 1638. 3. 6.)。自身の息子たちのためのコレギウム・ムシクムを主宰しているホイヘンスは、イタリアのポリフォニーの声楽曲を手にいれようと、友人に頼んでいるのである¹¹。音楽に秀でた貴族や、裕福な商人らが、宮廷や邸宅で私的に音楽を楽しむだけでなく、子供たちの学習の場にも力を入れていたのである。その他に、ホイヘンスはアムステルダムの Collegium Auriacum (オラニエのコレギウム) や Illustere School など音楽の勉強や演奏ができる機関にも関わっていた¹²。

1. 2. マウデンのサークル *Muiderkring*¹³

当時、代表的な詩人ホーフト Pieter Corneliszoon Hooft (1581–1647)が、アムステルダム郊外のマウデン Muiden にある自宅、通称「*Muiderslot* マウデン城」で「*Muiderkring* (マウデンのサークル)」という知識人サークルを開催していた。そこでは、ホイヘンスを始めとして、オランダの建築家、美術家カンペン Jacob van Campen (1596–1657)¹⁴、作曲家のスウェーリンク、詩人、外交官のブルグ Jacques Van der Burgh (1599–?)などがおり、主に詩作の交換をしていた。そしてメンバーの一人である音楽理論家バン Johann Albert Ban (1597/1598–1644)のマドリガル集『音楽の花束 *Zangh–Bloemzel*』(1642)の歌曲においては、ホイヘンス、ホーフト、テッセルスハーデらがその歌

詞を書くなど、サークルあつての音楽活動でもあった。バンは、イギリス女王付き音楽家の Varenne が来た際に、メンバーで、チェンバロの伴奏などで二、三声の歌や、ラテン語、イタリア語、オランダ語の単声の歌を歌い、Varenne がそれを賞賛したことをホイヘンスに報告している (2299: 1640. 1. 31.)。そのように彼らが、Muiden で、さまざまな様式の歌曲をプロの耳に耐え得る程度の実力で演奏していたことがわかる。

さらに、またオランダではこのホーフト宅以外では、ホイヘンスのデン・ハーグの自宅や、妻が亡くなった 1642 年以降には、デン・ハーグ郊外のヴォールブルク Voorburg にあるホーフウェイク Hofwijk (「宮廷を避ける」の意) と名付けた別荘やその庭¹⁵⁾、そして後にユトレヒトのスフルマンの家でも音楽実践を楽しんだ (Smit 1980: 214)。

次にマウデンでのように、ホイヘンスらが中心となって活動していた教養サークルに関わっていた女性たちについて具体的にみてみることにする。

2. オランダの教養女性たち

ホイヘンスが教養人の集うサークルで主に活動したのは、上述したように、アムステルダムとデン・ハーグ、そしてそれらの近郊であった。それはホイヘンスがいるからこそオランダでもっともレベルの高いサークルであるといってもよい。そこに参加していた女性たちは、ユートリシア・オーグел、スフルマン、テッセルスハーデ、アントワープの商人 Gaspar Fernandes Duarte の娘、フランシスカ・ドゥアルテ Francisca Duarte、ホイヘンスの妻 Suzanna van Baerle、ホイヘンスのドルプ Dorothea van Dorp (1592?-1657?)、そしてカゼンブロート Marietje Casembroot (1621-?) などが主なメンバーであった。それぞれが学識、教養が高く、楽器演奏に長け、優れた歌手でもあり、また彼らの中でバンやホイヘンス作曲の歌を歌っていたことが、ホイヘンスが友人たちと交わした書簡から明らかである (Brom-Struick 1932: 245-246; Vanderauwera 1989: 142)。本論では、とりわけホイヘンスと交流が深く、オランダのトップ・レベルの教養活動をしていた「主要メンバー」であるユートリシア、スフルマン、テッセルスハーデについて、書簡の内容から彼女たちの音楽活動を分析、考察することにする。

2. 1. ユートリシア・オーグел

ユートリシア・オーグелは、イギリス人のユトレヒトの軍の総督、オランダ軍将校、大佐オーグел John Ogle (1569-1640) とオランダ人の母の娘であり、ホイヘンスの姪であった。幼少時をイギリスで過ごし、ウィレム二世の妻、メアリーに宮廷の侍女としてオランダに赴く。1646 年に、ホイヘンスの秘書官になったデン・ハーグの総督スワン William Swann¹⁶⁾ と結婚した。尚本論では、結婚後にスワン夫人と宛名が変わることもあるが、煩雑さを避けるためにユートリシアで統一することにする。ユートリシア (と彼女の娘) はホイヘンスから音楽教育を受けており、ホイヘンスが、ユートリシアに歌曲集 “Pathodia” を献呈していることから、彼がユートリシアをもっとも優れた音楽家の一人として扱っていることは、次の、彼の別荘の名にちなんだ詩 “Hofwijk” においても明らかである。

彼女がここで歌うのを聞いた、そして今でも。
ナイチンゲールのように歌う、いやナイチンゲールをしのいでいる。

(Hofwijk, lines 409-410, Leerintveld 2002: 26)¹⁷⁾

ユートリシアの名が登場する書簡は、Rasch (2008) が編集した書簡集において全 37 通であり、そのうち 19 通がホイヘンスからユートリシア宛のものである。また彼女に宛てた手紙の書き出しには、「私のたいへん立派な、そしてたいへん博学な生徒さん」(3279) や、「私の親愛なる立派な学者さん」(3302) などとあるものもあり、自分の弟子でありながら、彼女を敬愛している様子が窺える。本論では、これらの書簡の中から直接音楽に関する書簡を選び、ホイヘンスからユートリシア宛のものを 14 通 (表 1)、そしてユートリシアに言及しているその他の書簡を 12 通 (表 2) の内容をみてみることにする。手紙の整理番号は Rasch によるものである。尚ユートリシアからのホイヘンス宛の手紙はそのほとんどが失われており、夫のスワンのホイヘンス宛の書簡のいくつかにユートリシアの文をみることができる。また書簡中に登場する人物については、表 5 のリストで確認されたい。

まず表 1 では、ホイヘンスからユートリシア宛の書簡について、その内容を分類することにする¹⁸⁾。すなわち、①彼女の演奏に関するもの、②ホイヘンスの自作品の報告 (またその演奏)、③ユートリシア以外の

表1 Huygens の Utricia 宛の音楽・演奏に関する手紙

整理番号 日付(年月日) 地名	宛先地名	内 容	要約、備考 (○付き数字は内容の分類を示す)
3092 1642. 8. 5. Bodeberg の軍	Den Haag	昨日 Dorp 嬢から二つの美しいエールを受け取りました。あなたのためにそれを複写します。	① Huygens から Utricia への初めての手紙。
3279 1643. 6. 19. Voorn	Den Haag	あなたにタブラチュア譜(楽譜)を送ることができません。	① 約束の鍵盤楽器曲の楽譜の送付。
3302 1643. 7. 6. Assenede	Den Haag	私はあなたの美しく気高い手に最も適していると思われる曲の中から、新しいものをいくつか送りました。これらの曲をあなたに練習させたら、非常識にもあなたのすばらしい能力について忘れてしまったのか、ということになるでしょう。(追伸) あなたは、この歌が、私が以前あなたに教えたものとは少しちがっていることがわかるでしょう。しかしこちらが本当の音です。私が間違っていました。	① [3279] の続き。鍵盤楽器曲の楽譜を添付。 Utricia の音楽能力を賞賛。 追伸で、自作の歌曲の以前のまがい指摘。
3862 1645. 1. 1. Den Haag	Utrecht	ユトレヒトであなたが約束してくれた音楽は、まだ当分ともに演奏できないでしょうね。 (追伸) どのようにあなたは Sibylla (Schurman) を制御していますか。彼女にラテン語の本を送ってから8ヶ月になりますが、返事がありません。	② アンサンブルを願う。 ⑤ Schurman から長い間返事がないことを相談。
4242 1646. 1. 7. Den Haag	Utrecht	あなたのすばらしい声でしたら、このような最も凡庸な(私の)曲でも表現できると思いますので、ぜひ歌ってほしいです。	① 自作曲の演奏の依頼。
4762 1648. 2. 23. Den Haag	Teilingen	ある人の不快なテオルボと、ある人のハスキーな声によって、祝宴が煩わされました。両者がハーモニーにぶつかり、目をくらませました。しかし Stoeffken 氏と私は2本のリラ式のヴィオールで驚異を弾きました。それはうっとりさせるような美しさでした。私はオルガンで悲痛な《ラクリメ Lachrimae》※を弾きました。私のバス声部の上でその素晴らしい弓が上下に動きました。	③ 自身の失敗に終わったテオルボのアンサンブル。 ③ Stoeffken 氏のヴィオールの演奏の賞賛。 ※この《ラクリメ》は、おそらく Sweelinck か Scheidemann 作のものであろう。
5310 1653. 9. 5/15. Hofwijck	Utrecht	さまざまな新しいアルマンド、クラント、サラバンドなどが、あなたのいらっしゃるのをお待ちしております。Francisque (Francisca Duarte) がいらっしゃる前にマスターしておかなければなりません。我々の名高い Sibylla (Schurman) がなぜ去っていったのか、またどこに行かれたのか、これは我々にとって最も不可解な知らせです。もしあなたがそれについて教えてくださいたいです。	② 自作の曲を、Utricia に弾いてもらうのを待つ。 ⑤ Schurman の動向についての心配。
5338 1654. 3. 17/27. Hofwijck	Utrecht	我々の大事な Sibylla (Schurman) と彼女の信仰の変化について、あなたがいかに思われようと、そうした知らせを受けるでしょう。あなたは、(新しい調律の)リュートとチェンバロのための、新しいすばらしい曲を聴くことになるでしょう。そしてその曲のハーモニーがあなたの耳を喜ばさないとしても、その輝かしいタイトルがあなたの目を驚かさずでしょう。それは、《ロレーヌ公女の嘆き Plaintes de Mad. la Duchesse de Lorraine》、《彼女の娘、王女の嘆き Plaintes de Mad. la Princesse, sa fille》、《ドゥワルテ氏のトンボーと葬儀 Tombeaux et funerailles de M. Duarte》です。	③ Schurman の信仰についての心配。 ② リュートとチェンバロのための新しい曲についての報告。Utricia に聞いてほしい。
5568 1658. 1. 30. Den Haag	Utrecht	テオルボだけのものではなく、ハーモニーの伴奏がついたもの(歌曲集 "Pathodia")を送ります。	① テオルボの通奏低音ではなく、通奏低音をともなった3声の Pathodia を送る。
5647 1660. 5. 7. Den Haag	Utrecht?	(追伸) あなたがブレダで、Corbetta 嬢のすばらしいギターを楽しめたらと願います。聴く価値があり賞賛に値します。	③ Corbetta のギター演奏の賞賛。
5899 1662. 8. 17/27. Paris	London	私は家を出てから約30の新しい曲を作曲しました。Dufaut 氏にそのうちの何曲かを聞いてもらいました。私の取るに足らない曲に喜んでくれました。あなたが Teilingen で評価してくださったジグもそうです。たしかに彼は私が今までにみた中でまれにみる作曲家です。そしてユーモアのある人です。	③ Huygens は、パリでフランスで活躍していたリュート奏者兼作曲家 Dufaut と知り合い、自分のリュート曲をみてもらった。Utricia と彼の夫 Swann もデュフォと知り合えばと願う。
6594 1666. 12. 29. Den Haag	Hamburg	最近私は Froberger の曲を知りました。去年から多くの曲を送ってきてくれているのです。ライン河を下ったときに、私はマインツの選定侯の宮廷で彼に会いました。すばらしい Froberger の類いまれな上達を聴き、また彼が私の話を我慢して聞いてくれることほど喜ばしいことはありませんでした。彼の曲をリュートに編曲しました。	③ Utricia の夫 Swann が Huygens に紹介した、ドイツの作曲家 Froberger にマインツで会う。彼の曲をリュート用に編曲。
6665 1668. 6. 6. Den Haag	Utrecht	それではもし4.25オランダ・エル(約293cm)の長さの2段鍵盤のチェンバロを説得されたら、今の私と同様、どうでしょう。あなたに、そのもっとも素晴らしい音とその他の部分が完璧であると言うことができるでしょう。	④ Huygens の新しいチェンバロを、Utricia に見せたい。当時発明されたばかりの2段の鍵盤をもつ。
6873 1672. 12. 10/20. Den Haag	Utrecht	我々は、Casembroot 夫人のチェンバロと私のテオルボで「物音」をたてますが、あなたがそれを非難しないという自信はあります。	③ Huygens らのチェンバロとテオルボのアンサンブル。
6887 1673. 3. 10. Den Haag	Hamburg	私は、不機嫌にヴィオール、リュート、テオルボ、二段鍵盤のチェンバロを弾くこととときつぶしてきました。このすべての楽器で楽しい時間は過ぎましたが、一年以来私はギターばかり弾いており、この「ミゼラブルな」楽器にあらゆるジャンル、そして音律で30曲以上の曲を作りました。 (追伸) あなた古くからの友人 Sibylla (Schurman) が、我々が聞かされたように、彼らの結婚について係争中であると嘘偽りなく告白しました。	③ Huygens が演奏する楽器。フィドル、リュート、テオルボ、チェンバロ、ギター。 ⑤ スフルマンの状況についての心配。

表2 Utricia に言及する手紙

手紙番号 日付(年月日) 差出人 (地名)	宛先 受取人 (地名)	内 容	要約、備考 (○付き数字は内容の分類を示す)
3726 1644. 8. 30. Huygens (Voor Sas-van-Gent)	Beringhen (Paris)	オーグル嬢 (Utricia) が私のテオルボ伴奏でイタリアの歌を歌ってくれるという骨折りをしてくださいました。	①Utricia との共演を友人へ報告。
4256 1646. 1. 22. Swann (Utrecht)	Huygens (Den Haag)	Utricia はまもなくあなた (Huygens 氏) に会えると思います。(追伸) あなたにチェンバロ用のすばらしい曲をお送りします。	⑥Utricia の夫 Swann による 4242 (表1) への返事。Utricia による追伸。
4299 1646. 3. 25. Swann (Utrecht)	Huygens (Den Haag)	Utricia はあなた (Huygens 氏) の新しい曲を知りたいので、あなたに会いたがっております。	⑥Utricia による短い追伸。
4527 1647. 1. 24. Swann (Breda)	Huygens (Den Haag)	私の妻 (Utricia) が風邪で声が出なくなり、悲しんでいます。彼女が、あなたのコンソートに参加できればと思っております。	⑥Utricia が長期間アンサンブルに参加していないことを彼女の夫が心配。
4561 1647. 3. 3. John Ogle (Breda)	Huygens (Den Haag)	私の妹 (Utricia) のチェンバロが鳴らないと言っております。彼女の声も、あなたの国の、氷の上の一足のスケート靴のようです (声がしゃがれている)。	⑥妹の Utricia の悪い調子のチェンバロと、悪い声の調子の報告。
4692 1647. 10. 21. Huygens (Den Haag)	Cimens (Antwerpen)	あなたが作ったカンツォーナとアリアを、Breda 出身のヴィルトウオーザ (Utricia) に歌ってほしいです。	①Cimens 作の歌を Utricia に演奏依頼予定。
4719 A 1647. 12. ca 20–25 Huygens (Den Haag)	Schurman (Utrecht)	本 (歌曲集 "Pathodia") が遅れていてすみません。彼女 (Utricia) のすばらしい声だけでなく、彼女の人を魅きつける力、そしてすばらしい趣味も、あなたの学識ある耳とうまく合うでしょう。	①Schurman と Utricia の両方に "Pathodia" の演奏の依頼。
4724 A 1647. 12. 18. Schurman (Utrecht)	Huygens (Den Haag)	我々のすばらしいセイレーン (Utricia) はその (歌曲集 "Pathodia") の中から一つ選んで歌いました。私のミュージズは、音符に関しては Utricia とのハーモニーに、まだ満足できるのではなく、白鳥のとなりにいる鶯鳥のようです。またともに練習したいです。	①Schurman は、Utricia とともに演奏するには、自分の出来が不十分との感想をもつ。
4812 1648. 5. 3. Duarte (Antwerpen)	Huygens (Den Haag)	あなたはチェンバロを持ちたいとおっしゃっていましたが、高声の歌の伴奏をよくする Swann 夫人 (Utricia) のものよりも、アルマンドやクラントを弾くためには、二音低くまで、二段目の鍵盤は一音低くまで音がなければならぬでしょう。	④Duarte は Couchet による二段鍵盤のチェンバロについて説明。その際 Utricia の楽器を比較に使用。また音色、音の高さ、上鍵盤と下鍵盤の違いなどについて詳細に説明。
4839 1648. 7. 1. Swann (Breda)	Huygens (Den Haag)	Duarte 氏と彼のお嬢さん (Francisca) のところで、すばらしいアンサンブルのハーモニーを聴きました。リュート、ヴィオール、ヴァージナル、そして歌です。とりわけヴァイオリンやコントラバスとともに演奏するブリュッセルのカストラートは筆舌につくしがたいです。	⑥Utricia の健康のために訪れたブリュッセルで見聞した演奏会、そしてアントワープの Duarte 家での演奏についての報告。
4979 1649. 9. 15. Swann (Wenen)	Huygens (Den Haag)	(追伸) 我が妻 (Utricia) の歌声とチェンバロを超える者がここにはいません。	①⑥Swann は、皇帝フェルディナンド3世のところでアンサンブルを聞き、Froberger を知った。彼は Froberger から曲を手にいれ、Huygens に送った。
5324 1654. 1. 20. Huygens (Den Haag)	Lanier (Brussel?)	Swann 夫人 (Utricia) と私が、この曲集 "Pathodia" の何曲かについて「美しい演奏 beau bruit」を奏でるのを、聴きにきてくれたらうれしいです。	①Lanier 氏に "Pathodia" の楽譜を送付。感想を求める。

音楽家の演奏の報告、また彼らとの音楽活動、④新しいチェンバロについての報告、⑤返事のないスフルマンに対する心配、とする。これらの手紙においては、4242におけるように、ユートリシアの歌唱力を賞賛し、自作品の演奏を依頼しているものが多い(①)。同様に、3092, 3279, 3302, 3862, 5568におけるように——ホイヘンスはユートリシアに歌曲やチェンバロ曲の楽譜を添付することが多いのだが——、ホイ

ヘンスが、声楽やチェンバロの演奏がうまいユートリシアに演奏をしてもらう、あるいはともにアンサンブルで演奏する意図でそうしていることがわかる。また5310, 5338のように、ユートリシアに楽譜を送らないまでも、自身が新しく書いた曲について報告するものもある(②)。また4762, 5647, 5899, 6594, 6873は、ホイヘンスが、彼が見聞してきた音楽家についての報告、6887は、自身が演奏する楽器についてである

(③)。また6665はホイヘンスが新しく購入したチェンバロについての報告である(④)。

さらに表2の、ホイヘンスが彼の友人らに宛てたり、彼らがホイヘンスに宛てたりしたユートリシアの名が登場する手紙においては、ユートリシアの演奏とその評価についての報告が多い(分類番号は表1に準じ、家族による彼女についての報告を⑥とする)。それはユートリシアの演奏(①:3726)、あるいはこれからの演奏予定やその希望(①:4692, 4719 A, 5324)、あるいは彼女の歌唱の賞賛(①:4724 A)がほとんどである。またユートリシアの夫スワンや彼女の兄のオーグル John Ogle (Jr.) (1605/10?-1663?)による、彼女についての詳細な(風邪を煩う、歌えないなど)近況報告があり(⑥:4256, 4299, 4527, 4561, 4839, 4979)、家族ぐるみの付き合いであることもわかる。またホイヘンスとユートリシアのチェンバロの性能の比較をしたりしているものもある(④:4812)。

このようにユートリシアへの手紙は、彼女の音楽能力を高く評価した上で、とりわけ演奏に関するものが多い。彼女には、こうしたオランダ内外の音楽家との交流や、その際に演奏した曲目を詳しく書き送っている。しかもここにはフランスのリュート奏者デュフォやウィーンの宮廷オルガニストのフローベルガーなどの、当時ヨーロッパで名を馳せる音楽家が登場している。ホイヘンスが彼女に、単なる社交辞令ではなく、本心から彼女の音楽能力を賞賛しており、またそれだからこそ自身と他の音楽家との個人的なつきあいについても喜んで彼女に報告しており、個人的に親しかつたことが窺われる。また音楽に関わるものではないが、ユートリシアと共通の友人スフルマンについて、「Sibylla」という愛称で触れ(3862, 5310, 5338, 6887)、また内容もスフルマンの信仰の変化に関わるものなどであり、彼らの親しさを示すものである(⑤)。またユートリシアに関する手紙には、演奏やその内容、またユートリシアに対する賞賛、またユートリシアが聞いて喜びそうな他の友人や知り合いの音楽活動の報告など、具体的にその内容を伝える、音楽に直接関わるものがほとんどである。その相手は必ずしもマウデンのサークルでの顔なじみばかりでなく、パリ、ロンドン、そしてアントワープの音楽家や知人もおり、彼女の歌唱能力の高さや交際範囲の広さが窺える。

2.2. A. M. v. スフルマン

スフルマンは、ケルンで生まれ、1615年にユト

レヒトに移った。スフルマンの専門は宗教学であったが、彼女がいくつかのヨーロッパの言語を含め、アラビア語、ヘブライ語、アラム語など14言語を解し、科学や文芸にすぐれていただけでなく、肖像画などの絵画、彫刻、模型製作などの美術²⁹⁾、音楽にすぐれていたのは当時のだれもが認めるところであった。また彼女は、ホイヘンス、デカルト René Descartes (1596-1650)、ヴォエティウス Gisbertus Voetius (1589-1676)、そしてメルセンヌら、当時のトップ・レベルの学者とラテン語で書簡を交わしていた。

スフルマンは、そのようにデカルトとヴォエティウスの両哲学者と親しかったが、新しい哲学対アリストテレス学派の哲学という論争に巻き込まれることになり、結局1644年にはプファルツ伯夫人エリザベスに、デカルトが無神論者であると批判し、ヴォエティウスを擁護している(Irwin 1999: 7)³⁰⁾。彼女は、このヴォエティウスのサポートもあり、ユトレヒト大学で講義を受けた最初的女性学生であった。男性の学生が彼女の姿をみられないように、教室の後ろに隔離された小部屋で授業を受けていたのである。また後述するテッスルスハーデも、スフルマンのギリシア語、ラテン語、カリグラフィー、銅版画、絵の教養、歌、チェンバロ、そしてリュートの演奏を賞賛している(Irwin 1999: 5)。

スフルマンに言及する書簡は、Worpに25件あり、Raschにおいてはそのうち5件を含む18件が掲載されている。またそのうち5件はユートリシアのものと重複している。ホイヘンスからスフルマンへは3件、スフルマンからホイヘンスへ2件で、それ以外は他の書き手によるものである。スフルマンにおける手紙の分類は、①演奏に関するもの、②スフルマンに音楽について識者の意見を求めるもの、③それ以外のもの、⑤既に宛てた手紙に対して返事のないスフルマンに対する心配、とする。

表3をみると、スフルマンとホイヘンスのやりとりは、ユートリシアとは少しちがったものになっていることがわかる。たしかにスフルマンはユートリシアと同様に歌を歌い、チェンバロを演奏するのであるが、多くの手紙にみられるように、彼女に求められる役目にはより学識的な面が大きい。ホイヘンスが、スフルマンへ宛てた手紙において、スフルマンとユートリシアの両方に“Pathodia”中の曲を歌ってほしいと頼む際も(①:4719 A)、ユートリシアに対してはすばらしい声をまず求めているのに対し、スフルマンには「学識ある耳」を求めているのである。

表3 Schurman と彼女の音楽に関する手紙

手紙番号 日付(年月日) 差出人 (地名)	宛先地名	手紙文の内容	要約, 備考 (○付き数字は内容の分類を示す。 ○のないものはそれらの分類外。)
2422 1640.6.26. Huygens (Maldeghem)	Ban (Haarlem)	Mersenne から受け取り, 写しを取ったもの (Boësset の歌曲) を, きちんとした配慮と趣味をもった音楽の手引きを備えている, すばらしい女性 Schurman に, 私の代理で送ったらいかがでしょうか。(中略) Mersenne が最近送ってくれた新しい記譜法の楽譜も彼女に渡してもらえませんか。	②Huygens は, Ban に, エール・ド・クール論争に使用する Ban 自身と Boësset による "Me veux-tu voir mourir" と, Le Maire の新しい記譜法 (musique almerique) の楽譜の, Schurman への送付を提案。
2482 1640. 8. 13. Ban (Haarlem)	Huygens (Den Haag/ Rijnberg)	Schurman にフランスの歌と新しい記譜法を送りました。	②Ban は, 自分の作品と Boësset の曲に対する分析, そしてフランスの記譜法 (Le Maire の) を Schurman に送付。
2495 A 1640. 8. 20. Ban (Haarlem)	Schurman (Utrecht)	右項を参照。	②Ban は Schurman にエール・ド・クール論争の対象になる Boësset の歌曲に対する批判的な分析を送付 (2422,2482 参照)。
2546 A 1640. 9. 23. Ban (Haarlem)	Huygens (Den Haag)	右項を参照。	②2495 A の Schurman 宛の手紙の写しを Huygens に送付。
2564 1640. 11. 3. Mersenne (Paris)	Huygens (Den Haag)	右項を参照。	②2495 A の手紙の写しが Mersenne に送られた。Mersenne はこの論争に関する Huygens と Schurman の意見を請う。
2661 1641. 3. 8. Huygens (Den Haag)	Voetius (Utrecht)	(追伸) 2番目の譜例を名高い Schurman に渡してくれませんか。	③Huygens は Voetius に『オルガン奏法 Orgelgebruyck』を送り, 彼の意見を請う。Schurman にも同じものの送付を彼に頼む。
2671 A 1641. 3. 8 (/18) Voetius (Utrecht)	Huygens (Den Haag)	Schurman に譜例を二つ送りました。Schurman が自身で描き, 彫った肖像画を送ります。	②Voetius は譜例を Schurman への送付を報告。また Schurman が自身で彫刻した肖像画を送付。
2990 1642. 5. 1. Ban (Haarlem)	Huygens (Den Haag)	先日 Hooft が, Schurman 宛の私の手紙 (2495 A) を読んだ際に, 私に次の言葉を書きました。「私が音楽の識者だとしても, わたしはあなたの音楽の発音の正確なルールについて, 即座に率直に賛成することにはまったくひるみません」	③Hooft が一連の論争において彼が Ban を擁護していることを, Ban は Huygens に報告。Ban は, パリの助言者 (Mersenne) のコメントは気にかけていない。
3155 1642. 9. 16. Ban (Haarlem)	Huygens (Sonsbeek)	イングランドの女王付き宮廷楽長 Robert 氏が, Johan Godschalk van Schurman (A. M. v. Schurman の兄) がよこした賛辞を, 私に送ってくれました。彼は私が彼の妹に 2年前に書いた手紙に感謝をしていました。	③Schurman の兄は, Ban が Schurman (妹) に送った手紙を読み, その内容に感銘を受け, 音楽について Ban と音楽談義をしたいという趣旨の手紙の報告。
3862		表1参照。	⑤
4617 1647. 7. 8. Huygens (Den Haag)	Schurman (Utrecht)	私の ("Pathodia" の) 詩編は, あなたが我慢強い耳で手を貸してくれたのですが, すべて印刷しました。私が加えたフランス語とイタリア語の歌が続きます。	② "Pathodia" の出版の報告。そのうちいくつかの曲を Schurman に送付。
4719 A		表2参照。	①
4724 A		表2参照。	①
5310		表1参照。	⑤
5338		表1参照。	⑤
5667 1660. 12. 5. Huygens (Den Haag)	Schurman (Utrecht)	右項を参照。	②Schurman に教会で使用するための詩編を送付。彼女の意見を請う。
5679 A 1661. 1. 23/2. 2. Schurman (Utrecht)	Huygens (Den Haag)	右項を参照。	②5667 への返事。Huygens が送付したものに同意。
6887		表1参照。	⑤

その様子が顕著に表れているのは、1640年の「エール・ド・クール論争」¹⁾においてである。表3において5通の手紙がそれに関係するものである(②: 2422, 2482, 2495 A, 2546 A, 2564)。1640年にメルセンヌ、ホイヘンス、そしてデカルトは、マウデンのサークルに参加していたバンと、ルイ13世治世下の宮廷作曲家ボエセに、同じくサークル仲間のカンペンを通して、フランスの聖職者の詩人アベール Germain Habert de Cérizy (1615-54)の詩“Me veux-tu voir mourir (わたしが死ぬのをみたいのですか)”にエール・ド・クールを作曲させ、「歌比べ」をさせた。バンがそのエールの中で実践した「普遍的な音楽の作曲法」を彼らは強く批判し、メルセンヌは「音楽は心と耳を楽しませるもの、人生を少し甘くしてくれるもの」(2573 A: 1640. 11. 14.)とし、ボエセを擁護した。バンが、デカルトやメルセンヌからその歌曲の出来をたたかされると、彼はスフールマンに長い手紙を書いて助けを求めた。またホイヘンスはそのあいだをとりもち、手紙の写しなどをバンに送っている。それ以外にも、スフールマンとのやりとりではなく、スフールマンに曲についての意見を求めるものもある(②: 2671 A, 4617)。

このように、スフールマンは、ホイヘンスのみならず、まわりの哲学者や学識者たちが意見を求めるご意見番のような存在でもあった。しかしそれゆえに、神学論争に巻き込まれてしまったともいえる。1660年代に一度両者の詩編の送付やそれに対する返事のやりとりがあるが(②: 5667, 5679 A)、それ以外は3862(表1, 1645年)の手紙に始まる、スフールマンからの手紙が途絶えるブランクの期間が長く続く。デカルトとヴォエティウスの神学論争のために、結局はヴォエティウス側につくことになったスフールマンが、デ

カルトと親しいホイヘンスを気遣ったのだろうか。ユートリシアの箇所でも既述したように、ホイヘンスは「Sibylla」の愛称でスフールマンの消息を気にする内容の書簡を書いており、ここにもホイヘンスの私的な気遣いがみられる。さらにホイヘンスとヴォエティウスがやり取りする中にスフールマンの名が挙がることもあり(③: 2661)、ホイヘンスはデカルト側にもヴォエティウス側にもついておらず中立的であることがわかる。

2.3. テッセルスハーデ

アムステルダムに生まれたテッセルスハーデも、商人である父 Roemer Visscher (1547-1620)、そして姉 Anna Visscher (1583-1651)とともに、オランダ黄金時代の詩人としてその名が刻まれている。彼女もラテン語、ギリシア語、イタリア語に優れ、絵画、彫刻、エッチング、タペストリーの制作をおこない、歌唱を中心としてすぐれた音楽家であった。現在もアムステルダム国立美術館には、彼女の手によるカリグラフィをほどこしたグラス作品が残っている。彼女は1623年に船長の Allard Jansz Crombalch (?-1634)と結婚し、彼が亡くなった後に、ホイヘンスや、マウデンクリングのメンバーである詩人のバルレウス Caspar Barlaeus (1584-1648)が彼女に求婚したが、彼女は断っている。主宰者ホーフトも、彼女についてしばしば「甘いミルク・ハート zoetemelk hart」と呼んでいたほどであり、「マウデンのサークル」の仲間では中心的女性のメンバーであったことが窺われる (Vanderauwera 1989: 142)。

このテッセルスハーデにも、マウデンのサークルのメンバーである作曲家バンは、メンバー作の歌詞による自作の曲を歌ってもらっていた。テッセルスハーデ

表4 Tesselschade への音楽に関する手紙

手紙番号 日付(年月日) 差出人 (地名)	宛先地名	内 容	要約、備考
2973 1642. 4. 2. Ban (Haarlem)	Huygens (Den Haag)	まず Hoofdt の時を、その後すばらしい女性 Tesselschade の詩を選びました。	Ban は Descartes の提案で、三声の歌を Hoofdt と Tesselschade のオランダ語の歌詞で出版。
3114 1642. 8. 19. Huygens (Bode 2 berg)	Ban (Haarlem)	(追伸) あなたが問い合わせていた、あなたの音楽に選びたいとしていた、John 博士の優れた詩を“Engels huis”からなくしてしまいました。同じ著者のエビグラムについての私のオランダ語のヴァージョンを Tesselschade に聞いてみてください。	Huygens がなくしてしまった、詩の著者の著作物について、(それに詳しい) Tesselschade に問い合わせるように Ban に提案。
3234 1643. 4. 10. Ban (Haarlem)	Huygens (Den Haag)	(追伸) Tesselschade が私を訪れ、私 (Ban) の音楽を聞くために、あなたが耳を貸してくれるかどうか尋ねていました。	Ban は Huygens に『歌の花束 Zangbloemzending』を送る。Tesselschade の訪問を受けた。

表5 手紙中に登場する人物リスト

名前, 生没年 (生没年)	職業, その他, Huygens とのつながり
Ballard, Robert (c 1613-73)	ルイ 13 世から出版の特権をもつ唯一の出版者。Huygens の "Pathodia" を出版 (1647)。1612 年からフランスの王室でリュート奏者・作曲家であった同名の Robert Ballard (c 1575-c 1645) の息子。
Ban, Johann Albert (1597/98-1644)	ハーレムのカトリックの家に生まれる, 司祭, 音楽理論家。Mersenne の企てた Boësset との「エール・ド・クール」競争に敗れる。
Barlaeus, Caspar (1584-1648)	詩人, 神学者, 哲学者。アムステルダム大学の前身, Athenaeum Illustre の哲学と修辞学の教授。
Beringhen, Henri de (1603-1692)	フランスの官僚で, 後にフランス王の主馬頭。
Boësset, Antoine (1586-1643)	ルイ 13 世の王室で, 王室の子息のための楽長 (1613-), 女王の音楽長 (1617-), 王室の秘書 (1620-), 王室の音楽の監督 (1623-) などを歴任。エール・ド・クールの作曲家として名高く, フランスでは最も早く通奏低音付きの歌曲を書いていた (出版は Huygens の "Pathodia" (1647) が先)。Mersenne は彼を「歌曲の装飾音の師であり, 彼を模倣すべき」とする。
Burgh, van der Jacques (1599-?)	詩人, 外交官。1628 総督の秘書 (フロニンゲンとフリースラント)。
Casembroot, Marietje (1621-?)	チェンバロ奏者。ホイヘンスの詩『1 台のチェンバロを 2 本の対にならない手で (2 人の奏者で) Twee ongepaerde handen op een clavecimbel』(1648) はチェンバロ奏者の彼女のことをうたったものである。
Cimenes, Marchese R. (?-?)	不詳。スペインカポルトガル系の "Ximenes" 姓か。
Corbetta (?-?)	イタリア出身のギター奏者。
Couchet, Joannes (1615-55)	アントワープのチェンバロ製作家。Huygens のためにチェンバロを製作している。(1655 年 4 月 6 日)
Descartes, René (1596-1650)	フランスの哲学者。Mersenne の企てた Boësset との「エール・ド・クール」論争においても意見を述べる。
Dorp, Dorothea van (1592?-1657?)	ハーグで Huygens の近くに住んでいた, 彼の従姉妹。
Duarte, Gaspar Fernandes (1584-1653)	アントワープの銀行家。アントワープ在住のチェンバロ製作家 Couchet のチェンバロを Huygens に紹介する。
Dufaut (c 1604-before 72)	フランスの作曲家・リュート奏者。Gaultier の弟子。
Froberger, Johann Jacob (1616-67)	ウィーン宮廷のチェンバロ奏者, 作曲家。オラニエ公のイギリス大使 Swann が 1649 年に彼の演奏を聴き, 「チェンバロにおいてたいへん稀にみる人物」と Huygens に報告。
Gaultier, Dennis (1603-72)	フランスのリュート奏者, 作曲家。
Hacquart, Carolus (c 1640-1701?)	ユトレヒト, アムステルダム, デン・ハーグの宮廷でヴィオール奏者, 作曲家。Maurice 公 (ブラジル総督) と Huygens の庇護を受けていた。
Hotman, Nicolas (1610-63)	ベルギー出身のフランスで活躍したリュート, ヴィオール奏者。作曲家。Saint-Colombe の師。1659 年 Huygens にヴィオールとリュートの曲を送る。Huygens は彼を「音楽の偉大な巨匠 ce grande maître de la musique」としている。
Killigrew, Judith (?-?)	イギリスの女王付き侍女。夫の Dr. Robert Killigrew (1579-1633) は王付きの聖職者でウェストミンスター主任司祭。息子の一人は劇作家でヨーク公国の聖職者の Henry Killigrew (1613-1700), その娘は詩人で画家, ヨーク公妃の侍女の Anne Killigrew (1660-85) がいる。
Lanier, Nicholas (1588-1666)	イギリスのリュート奏者。1622 年にロンドンでホイヘンスは彼と知り合う。
Le Maire, Jean (1581-1650)	五線譜のシステムではなく, 「musique almérique」という音高やリズムを記号で示す新しい記譜法を発明した (この記譜法は彼の死後使用されていない)。
Lorraine, Madame de Béatrix de Cusance (1614-63)	ロレーヌ公国公妃。クラヴサンを弾いた。
Mersenne, Marin (1588-1641)	音楽理論家・哲学者。『音楽汎論』(1647) の出版。Descartes と深い交流がある。1638 年 Huygens が Ban に Descartes を紹介し, Descartes と Huygens が Ban を Mersenne に紹介した。
Robert, Antoine (?-?)	17 世紀のイギリスの女王 (Henriette-Maria de Bourbon, 1609-69) 付き宮廷付き楽長。
Saint-Luc, Jacques de (1616-c 1710)	フランドルのテオルボ, リュート, ギター奏者, 作曲家。1639 年ブリュッセルの王室礼拝堂付き音楽家。17 世紀末にサヴォワの Eugène 公に仕えた。
Schurman, Johan Godschalk van (1605-64)	A. M. v Schurman の兄。
Sohier, Nicolas (1588-1642)	アントワープ出身のアムステルダムの商人。
Stoeffken, Dietrich (17 世紀初め-?)	ヴィオール奏者。おそらく Holstein 出身。
Swann, William (c 1620-78)	デン・ハーグの総督。1646 年に Utricia Ogle と結婚。オラニエ公の外交使節団の一員としてドレスデンとウィーンにともに赴き, 皇帝の側で謁見もしている。

※論文中に説明のある人物はこの表では省いた。

自身が、「不死身のバンは幾度もエコーをする」と言い、バンがおそらくサークル内で何回も曲を試して歌わせ、彼女もまた歌っていたことをも窺わせる (Brom-Struick 1932: 246)。

彼女の名に言及しているホイヘンス関連の書簡で残っているものは全24件で音楽に関する書簡に関わるものが全3件である。そのうちホーフトからホイヘンスへ4件、その逆が5件、また上述のバルレウスからホイヘンスが5件、その逆の2件が主なものである。ホイヘンスはバルレウスへの手紙 (2960: 1642. 3. 5.) においてテッセルスハーデについての詩を載せるなどしており²²、その内容のほとんどが詩作に関するものである。本稿の表4には、Raschに掲載された音楽に関する書簡の3件のみを載せた。

2973にみられるように、マウデンのサークルで作曲を行っていたバンは、詩人のホーフトとともにテッセルスハーデの詩を曲に使用している。またホイヘンスも詩に関してバンから問い合わせのあったものをテッセルスハーデに問い合わせるように返事を書いており (3114)、詩作に関して彼女を信頼していたのがわかる。

おわりに

本論ではホイヘンスの書簡を通して、オランダ黄金時代の3人の女性たちの教養活動を書簡の内容からみてきた。ホイヘンスがオランダの、とりわけ彼が住んでいたデン・ハーグやその近くのホーフウェイク、アムステルダム、そしてその近郊のマウデン、またユトレヒトといった地理的に近い中での付き合いのあった女性たちの、ホイヘンスをめぐる中での、彼女たちが交わした書簡、あるいは彼女たちに言及している書簡から、彼女たちの行動やそれに対する評価をみてきた。それは彼のサークルの一部にしか過ぎないが、それでも女性たちのはなばなしい活躍をみせてくれた。

彼女たちが関わるオランダのサークルには、とりわけフランス、オランダ、ベルギーにおける各分野の最高レベルが集まっており、その人物たちはすべてホイヘンスという大人物と関わっている。デカルトやメルセンヌ、ヴォエティウスらと論争をし、スウェーデン女王とも知己であるスフルマン、このスフルマンとも親しく、同時代の、とりわけフランスの音楽家の作品を積極的に演奏し評価を得ていたユートリシア、そしてその二人とも付き合いがあり、ホイヘンスやホーフトと並んで歌曲に詩を採用されていたテッセルス

ハーデは、それぞれが多方面に才能や教養をもつ黄金時代に名を残す代表的な、まさに普通人であった。

彼らは、ホイヘンスを中心として、その私的な親しさを示す、共通の友人の様子を心配したり、健康を気遣ったりなどの、心のこもった私信も多くやりとりしていた。しかしそれだけではなく、その一方で当時の社交生活の一面を明らかにする、音楽の演奏、あるいは詩作についての具体的なやりとりを行っており、当時の教養人たちの文化生活ぶりを明らかにしてくれる。すなわち、余裕のある商人や外交官たちが詩作や作曲、演奏に時間を費やし、新しい楽器や自作の曲、著名なドイツやフランスの作曲家や演奏家の曲などの楽譜を手に入れたり、また彼らの演奏などについての報告など、どん欲に情報交換をしたりしているのである。とりわけこのオランダの地は——フランスやイタリアのような文化の中心地とはいえなくとも——、17世紀前半の黄金時代において消費においては中心地の一つであり、むしろそこには多くの情報が集まっていたことを物語っている。当時、都市間の距離は現在よりも大きく感じられたはずだが、彼らはよく旅行し、またホイヘンス自身もパリで歌曲集を出版するなど、フットワーク軽くヨーロッパ大陸を縦横無尽に動き回っていた。その中で、女性たちは政治の要職に就くことはなく、また夫の転勤にともなう移動によりサークルのメンバーたちと遠く離れることになったとしても、まるで現在の電子メールや電話のような気軽さで、書簡を絶えず交わしている。そして、上述した音楽や詩作についての情報交換や、エール・ド・クール論争におけるような互いの音楽美学観についてまでも率直に述べあってもいるのである。

本稿ではホイヘンスの居住していたデン・ハーグやアムステルダムなどを中心にみていったが、今後は活動域の広いホイヘンスがロンドンやパリでも親交をもった友人たちについても、その活動内容を分析し、彼らの文化生活について明らかにしていきたい。

参考文献

- 赤木昭三、赤木富美子 2003『サロンの思想史—デカルトから啓蒙思想へ』名古屋：名古屋大学出版会。
- Brom-Struick, Willemien. 1932. "Stemonderzoek door Nederlanders." *Tijdschrift der Vereeniging voor Noord-Nederlands Muziekgeschiedenis*. 13, no.4: 238-267.
- Cohen, Albert. 1963. "Jean le Maire and La musique Almérique." *Acta Musicologica*. 35: 175-181.
- Crawford, Tim. 2001. "Constantijn Huygens and his musical circle" notes for CD "Music from the time of Vermeer. Con-

- stantijn Huygens and his musical circle.” Metronome MET CD 1051.
- Grijp, Louis Peter. 1987. “Huygens en de muziek.” *Oude Muziek*, No.2-2: 38-40.
- Irwin, Joyce, edited and translated. 1999. *Anna Maria van Schurman. Whether a Christian woman should be educated and other writing from her intellectual circle*. Chicago: University of Chicago Press.
- Irwin Joyce L. 1989. “Anna Maria van Schurman.” *Women Writers of the Seventeenth Century*. Wilson, Katharina M. and Frank J. Warnke, edited by. Athens: University of Georgia Press.: 164-185.
- Jager, Atrid de. 2005. *Che fuore sento fuore? Eenheid en verscheidenheid in Huguens' Pathodia sacra et profana*. (doctoraalscriptie, Universiteit van Amsterdam) <http://www.musicology.nl/Mtheses.html> (2009年10月18日最終アクセス)
- Jardine, Lisa. 2008. *Going Dutch. How England plundered Holland's Glory*. London: Harper Collins.
- Jonckbloet, W. J. A. & Land, J. P. N., edited. 1882. *Correspondance et œuvre musicales de Constantijn Huygens*. Leiden: Brill.
- 川田靖子 1990『十七世紀フランスのサロン：サロン文化を彩る七人の女主人公たち』東京：大修館書店。
- Leerintveld, Ad. ed.. 2002. *Hofweijk. Het gedicht de buitenplaats van Constantijn Huygens*. Walburg Pers: Zutpehn.
- 三島郁 2005「17世紀ヨーロッパにおける音楽ネットワークの形成－情報交換の中心人物ホイヘンスをめぐって」『民族藝術』21号：160-168。
- Rang, Brita. 1996. “‘An exceptional mind’. The learned Anna Maria van Schurman.” Baar, de Mirjam, et al., edited. *Choosing the better part. Anna Maria van Schurman (1607-1678)*. Dordrecht, Boston, London: Kluwer Academic Publishers.: 23-41.
- Rasch, Rudolf. 2007 *Driehonderd brieven over muziek van, aan en rond Constantijn Huygens*. Hilversum: Verloren.
- Rasch, Rudolf. 2005. “Descartes en de Ban-Boësset-controverse”. Koops, Willem, Leen Dorsman and Theo Verbeek, edited. *Née Cartésienne/ Cartesiaansch Gebooren: Descartes en de Utrechtse Academie 1636-2005*. Assen: Van Gorcum.: 178-195.
- Rasch, A. Rudolf. 1999. *Geschiedenis van de muziek in de republiek der verenigde Nederlanden 1572-1795*. <http://www.let.uu.nl/~Rudolf.A.Rasch/personal/dmh12.htm> (2009年10月15日最終アクセス)
- Rasch, A. Rudolf. 1992. “Constantijn Huygens. Zijn muziek en zijn loopbaan (deel I).” *Huismuziek*, No.3: 3-6.
- Rasch, Rudolf. 1983. “Ban's Intonation.” *Tijdschrift van de Vereniging voor Nederlandse Muziekgeschiedenis*, 33, no.1/2: 75-99.
- Rech, Adelheid. “Constantijn Huygens – Lord of Zuilichem (1596-1687).” (essential vermeer.com) http://www.essentialvermeer.com/history/huygens_b.html (2009年10月25日最終アクセス)
- Smit, Jacob. 1980. *De grootmeester van woord- en snarespel. Het leven van Constantijn Huygens 1596 – 1687*. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff.
- Vanderauwera, Ria. 1989. “Maria Tesselschade: A woman of more than letters.” Wilson, Katharina M. and Frank J. Warnke, edited. *Women Writers of the Seventeenth Century*. Athens and London: The University of Georgia Press.: 141-163.
- Wilson, Katharina M. and Warnke, Frank J. (eds.). 1989. *Women Writers of the Seventeenth Century*. Athens: University of Georgia Press. pp.164-185.
- Worp, J. A., uitgegeven door. 1911-1917. *De briefwisseling van Constantijn Huygens 1608-1687*. 's-Gravenhage: Martinus Nijhoff. (d. 1.: 1608-1634); (d. 2.: 1634-1639); (d. 3.: 1640-1644); (d. 4.: 1644-1649); (d. 5.: 1649-1663); (d. 6.: 1663-1687). “Brieven Constantijn Huygens 1608-1687” in: “Instituut voor Nederlandse Geschiedenis.” <http://www.inghist.nl/Onderzoek/Projecten/Huygens> (2009年10月25日最終アクセス)

注

- 1) ウィレム3世はイギリスのチャールズ2世(1660-85)とオラニエ公国メアリー王女の息子。
- 2) ホイヘンスはフェルメールにパトロンや顧客を紹介した(Crawford 2001: non page)。
- 3) その他にも王室付きオルガン奏者ラ・パール Pierre de La Barre (1592-1656), 王室付き副楽長のゴベール Thomas Gobert (17世紀初め-1672), ヴィオール奏者のオトマン Nicolas Hotman(1610-63)などがある。三島 2005参照。
- 4) 彼の秘書官スワン William Swann (不詳)が、派遣先のウィーンで演奏を聴いたフローベルガー Johann Jacob Froberger (1616-67)の曲を知るとすぐにその価値をいち早く認め、彼にフランスの宮廷クラヴサン奏者のシャンボニエール Jacques Champion de Chambonnières (1601/02-72)の作品をフローベルガーに紹介したのもまた彼であった(4979: Swann→Huygens: 1649. 9. 15.)。
- 5) 「最近ハーグに移ってきたばかりの実力のある音楽家 Carolus Hacquart (c 1640-1701?)の住まいは手狭なので、オルガンの置いてある宮廷の広間を、週に1度使わせてもらえないでしょうか」(7137: 1679. 10. 2.)。ナッサウ公はオラニエ公の弟であり、したがってホイヘンスとは非常に近しく、それによりホイヘンスの願いも叶い、ハーグ宮廷付きヴィオール奏者の Hacquartの監督のもと、週ごとの集いは1年に120回にのぼった。それは1704年にマウリツホイス Mauritshuisが火事になるまで毎週土曜日に続けられた。また人数は常に約12人であり、指揮の Hacquartには給与も支払われたということである(Rasch 1999: Hoogdstuk twaalf: De muziekcolleges: 8-11)。尚本稿では、Raschに所収されている書簡にはその番号を、それ以外のものについて Worpが編集した番号を付し、必要があれば差出人、受取人、そして日付を()括弧内に記す。
- 6) 彼女は、文学、科学にも精通し、デカルトと親しか

- ったスウェーデン女王クリスティーナ Kristina (1626-89) もパリ訪問の際に彼女を訪ねているほどであった。
- 7) ホイヘンスはニノンを、「リュートが巧みである」と賞賛し、同じく音楽の才のある、イギリスの女王付き侍女キリグラー夫人 Madame Killigrew (Judith Killigrew) に彼女を紹介したと (6796: 1671. 5. 14.)。このキリグラー夫人は、ホイヘンスによると「リュート、ギター、テオルボの、どの楽器においても難なくゴタイエやデュフォなどのたいへん美しい曲を弾く」。
- 8) サロンが開かれている際に、ニノンがリュートでクーラントを弾き、客たちが踊るという場面もあったようである (川田 1990: 178)。
- 9) 引用文中の [] は著者の補足。
- 10) この息子こそ、幼い頃のクリスティアーンであり、彼もまたチェンバロやリュートをたしなんでいた。
- 11) ソイエはマドリガルを送ったと返事を送っている (1813: 1638. 3. 12.)。
- 12) ホイヘンスはメルセンヌに、Collegium Auriacum (オラニエのコレギウム) や、ホイヘンスの師が Breda に設立したばかりの Illustere School について「Illustere School には 5, 6 人の優秀な教師がいる」と報告している (4446: 1646. 9. 12.)。
- 13) ホイヘンスがこの言葉を手紙で使用しているのはアムステルダムの Athenaeum の教授 Barlaeus (1584-1648) に 1 回あるのみであり (263: 1625. 5. 7.)、むしろ 19 世紀以降ホイヘンスをめぐる教養サークルの名として定着した。
- 14) ヴァン・カンベンは、デン・ハーグの、当時は宮廷であり、現在はフェルメールやレンブラントなどの絵画を収めている美術館であるマウリツホイスやアムステルダムの王宮の設計を行った。
- 15) 現在 Hofwijk はホイヘンス博物館となっており、彼が設計した庭や建物を楽しむことができる。
- 16) 表 5 参照。
- 17) 原文では以下の通り。“Die heb ik hier gehoord, die denk ik nog te horen,/ Die heb ik hier gezien de nachtegalen storen.”
- 18) 文中の括弧 弧内の○付き数字は内容の分類するものである。
- 19) 彼女は 1643 年にユトレヒトの画家ギルドにも入る。
- 20) オランダの理論家バンは、その事実を知っていたからこそ、後述する「エール・ド・クール論争」でデカルトらと対立した際に、スフルマンに擁護を請う手紙を書いた (2495 A 参照)。
- 21) エール・ド・クールとは 17 世紀のフランスの宮廷で作曲され歌われていた「宮廷歌曲」。
- 22) 原文では以下のようである。“Verstaet ghij 't, Tetselscha?/ Uw aensicht is aen stucken; / Ten minsten leert hier na /Aen beelden niet te bucken.”